

長崎まで

水野 公明

1. 宇佐から日田まで（10月26日（水））

天気は良さそうだ。朝6時15分我が家を出発。いつもの練習コースを畦道から一般道へと歩を進める。不思議と気負いが無い。昨夜すべての準備を終え床に就いた後に湧いてきた、多少の興奮と不安が今はない。もう犀は投げられた、ルビコンを渡るしかない・・・昨夜はそう思ったものだが。朝練のいつも会うランナーとすれ違う。私のいつもと違う出で立ちに怪訝顔である。挨拶を交わしてすれ違う。

服装は、上から、前後に庇のあるランニングキャップ、サングラス、20ℓのランニングバッグ、長袖のTシャツ（前にジッパー付きで首まで襟あり）半袖Tシャツの重ね着、ロングタイツの上に短パンを履く。ミズノのマラソンシューズ。ネックタオルを掛けチェストベルトで固定。ジャーニーランの達人重マエダ氏に頂いた微にいり細をうがつ助言を参考にする。バッグの中身は、ジャージ上下、下着、予備の長短Tシャツ各1枚、ワセリン、テープ、鋏、胃薬、筋肉痛対応の塗り薬、カロリーメイト1箱、洗剤4日分等である。サイドポケットには携帯電話、小銭、飴玉数個。ウエストポーチにお金、手帳を入れ、ペットボトルホルダー別途身につける。

30分で国道10号線に出る。いつもより遅いペースであるが、F水会長の「キロ8分ペースで楽しんで」という助言を思い出す。コンビニに寄る。最初のスポーツドリンク購入とトイレ借用。通勤時間帯が始まり車の通行量が増えた。10号線と分かれ一路耶馬溪へと向かう。大型トラックが軽いクラクションを鳴らして追い抜いていく。激励の音として、トラックに感謝。耶馬溪路の走路は、山国町までサイクリングロードを走る。これは昭和40年代まで走っていた軽便鉄道の跡を整備したものだ。駅舎の跡が残っている所、鉄橋、レトロな小さなトンネル、ロードに靱筵を干している事もあり、山里の暮しの匂いを嗅げる私の1番好きなランニングコースだ。青の洞門を過ぎると、1級河川山国川をはさみ国道212号線と並行する。対岸に車の騒音を遠く聞きながら進んでいると、サングラスの端に「？」を感じる。振り返るとなんと巨大なmamushiが日向ぼっこ中。やや寒くなったせいか全く動かない。小石を拾い遠くから投げしてみる。当たると鎌首をがっとう持ち上げ、口を180度近く開け、こちらを威嚇する。思わず後ずさりする。mamushiも一目散に河原へと姿を消した。これ

は吉凶どちらの前兆なのだろうか。蛇はどちらかと言うと吉兆のことが多いと思ひ、幸先いいことと思ひ歩を進める。

途中、ロードの補修工事が行われている。進行方向遠くに工事責任者らしき人がいる。近づくと話しかけてくる。長崎までのランニングを聞き、咄然としている。「馬鹿しかこんな事はしません」と私。「とんでもない。尊敬いたします」と工事氏。この人もランニングの心が判る人かなと思ひながら別れる。昼になり、耶馬溪道唯一のコンビニで助六寿司とお茶買う。食していると、先程の工事氏がコンビニに昼飯を買いに来たのか現れる。私が出発の用意をして身支度を整えると、車中で食事をしていた工事氏、わざわざ車を降りて来て、丁寧な激励の言葉を掛けてくれる。最敬礼のお辞儀と共に。振り返ると手を振ってかれている。手を振り返す。心が温かくなる。

サイクリングロードの終点コア山国に着く。此処からは、日田へ向け長い峠越えだ。山国町の「かかしワールド」という村おこしのイベントが催されている。いろいろな案山子が、取り入れの済んだ刈田に飾られている。まるで野外、いや田園美術館という趣である。走路の途中にチアーガール10数体が躍動感溢れる姿で立っている。思わず手を振ってみる。

峠道は段々と勾配がきつくなる。もともと登りは嫌いじゃない。ゆっくりと走りながら登っていく。眼下となった棚田の稲架が美しい。谷下の棚田、山家を余すことなく秋日が照らしている。走るにはこの秋日は煩わしい。流れ出る汗を拭きながら、頂上のトンネルに辿り着く。重マエダ氏の助言に従いバックから反射たすきを出し、掛けてトンネルに突入。大型車の音が反響効果ですさまじい。排気ガスも気にかかる。トンネルを抜けると水郷日田へ向けてここからは長い下り坂。ここ数年ランニング中に転倒する事が多くなった。転倒して怪我でもした時はこの計画は中止しなければならない。用心しながら下る。その内、調子付いてくるとそのことを忘れ、F水会長の「下りは道に直角に立ち、足は無造作位の気持ちで足を出すと良い」という言葉を思い出し、実践する。キロ6分位で気持ちよく下る。これが後で祟ることになる。三和酒類の日田工場入口看板を過ぎ、いよいよ日田の町並みに突入。「日田全麴」は三和酒類の銘焼酎。15:45。亀山公園近くの今夜のホテルに着く。一風呂浴びて早速、コインランドリーに行く。食事後、宿のベッドに横たわると両ふくら脛がピクピクする。痙攣の前兆だ。坂で調子こいたか。後悔先に立たず。消炎鎮痛剤をたっぷりと塗り込みベッドに入るが、不安が頭をかすめる。

2. 日田から佐賀へ（10月27日（木））

5時前に起床。入念に消炎鎮痛剤を両足に塗り込む。豆予防のテーピングをする。カロリーメイト、チオビタドリンク、アミノバイタルを摂取し6時ホテル出発。まだ暗い。散歩の人と行き交う。少し寒い。吐く息が白い。さすが日田。盆地特有の寒暖の差か。天気は良さそうだ。

県道677号から国道210号線に出る。三隈川を渡る時、日田の町を振りかえる。川霧が立ち込め、眠りから覚めやらぬ日田の温泉郷を包もうとしている。風情ある朝模様を思わず見つめる。210号線を、右に三隈川（福岡県に入れば筑後川）、対岸に国道386号、その上に大分自動車道を見ながら黙々と歩を進める。段々と登りの角度が増していく。歩道が狭い。大型車が飛ばして行く。重マエダ氏の忠告。危険を感じた時は右側通行。ここで躓いて、車道に転倒したら命はないなと慎重に走る。大型車の風圧を感じる。峠に懸かると歩道がなくなる。路肩を緊張しながら進む。大型車とすれ違う時に思わず左肩を背中に回す。あるいは横向きになる。トンネルに入る。さすがにここはトンネルの外側に歩道がある。福岡県に突入。果樹園が広がる。歩道が殆どない。道の駅「うきは」でトイレと水分補給休憩。

峠を下り終わると、210号線が旧道と新バイパスに別れている。迷うことなく、歩道のしっかりしたバイパスを選択。コンビニで塩昆布おにぎり野菜ジュースを腹に詰め込む。車が1台ゆうに通れるほどの歩道。今までの緊張感から解き放たれて快調にペースを守り走る。空は晴れて雲ひとつない快晴。天高し。新バイパスは全線開通をしていない。途中から旧道に出るか、筑後川の河川敷のサイクリングロードに行くか、選択しなければならない。心は河川敷を走ろうと決めている。旧道は歩道のない所が多いという情報だ。車とすれ違う恐怖は御免だ。ただ、一旦、河川敷に出てしまうとコンビニ、自販機は一切ない。行き止まりに到着。北へ進路をとり田舎道を筑後川へと進む。この辺は田主丸町か。庭手入れのご老人に道を問う。土手を二つ越えればサイクリングロードと言う。土手二つのアップダウンはきつい。尚且つ、突き当たれば右へと言う。右と言うことはバックすると言うことだ。

土手を越え、河川敷に降りる。素晴らしいサイクリングロードがある。バイパスの行き止まり地点で、久留米まで16キロの表示があったが、走り始めるとサイクリングロードに久留米まで後18キロのペイントがある。なんと言う事だ。2キロ以上×2だけ余分だが諦め走る。さすが九州の代表的な川だ。広い。大きい。サイクリングロードの左右河原の秋草が刈られている。その匂いを風が運んでくる。嫌いな匂いではない。どことなく深まりゆく秋の気配を感じる。川に沿い道は真っ直ぐに延びている。向こうからランナーがこちらに走ってく

る。水分補給場所を聞く。9キロ先の橋の下に水道栓があるとのこと。風もなくなり、暑い。膝が痛みだす。昨日の峠越えの後遺症か。河川敷の暑さは特別に感じる。水道設置場所に到着。蛇口に口を近づけがぶ飲み。旨い。橋の日影で15分程休憩。ペットボトルを満たし出発。

今回のジャーニーランの目的は同窓会出席である。旧友に会うのが楽しみだ。その一人、T永君が久留米にいる。電話番号を旧友のN口君に電話して聞き、T永君に連絡。残りキロから勘案して13時過ぎに百年公園で待ち合わせ。公園に到着。T永君、巨体を揺すり走り寄る。10年数年ぶりの再会。「T永」「M野」懐かしく呼び合う。インドカレーを馳走になり、明後日の同窓会での再会を約し再びジャーニーランモードに突入。

再び河川敷を走る。左土手上に久留米大学医学部の文字が見える。新幹線、在来線の鉄橋、一般道の橋を数本潜り筑後大堰に着く。この大堰を渡り佐賀への道をとる予定。ところがその堰に上がる道がない。河原で凧揚げをしているおじさんに聞くと、後戻りして途中から土手沿いを行きなさいと言う。またバック。膝の痛みが増す。右足の腫がチクチクする。靴擦れか。土手に歩道無。車の通行量が多い。恐怖を感じる。大堰を渡り佐賀へと国道264号線に進路を取る。筑後川と別れてはじめて歩道が出てくる。が、名ばかりの歩道。狭い。人がすれ違うのもやっとな。その上、変な勾配がついている。走りにくい事この上なし。途中、右側にあった歩道が、前触れもなく左側になったり・・・その繰り返しである。この道は過去何度も車で通ったことがある。疲労感を覚える。暑さのせいかな。途中、下村湖人の出身地の表示。「次郎物語」粗筋が思い出せない。考えたくない。疲労感と膝痛で速度が落ちる。途中歩く。何本ペットボトルを飲んだらうか。コンビニで買った氷菓子「がりがり君」がおいしい。早めにホテルに入り、ドラフト会議をテレビで見ようと思っていたが、とても無理と諦める。吉野ヶ里方面の案内板がある。晴天の秋日も西に傾き、今日を終わろうとしている。やっとな、佐賀市の看板が眼に入る。日が暮れてきた。秋の日暮れはもの悲しい。市街に入る。佐嘉神社を右に見て、とっぴりと日の暮れた通りをひたすら走る。同窓会幹事のM原君より状況把握の電話。気をつけて来てくれとの由。元気が出る。19時ホテル着。疲労困憊。部屋に入り、靴を脱ぐとソックスに出血のあと。靴擦れあり。当日、ホテルでカレーサービスあり。外に出て行く元気もなく、昼夜続けてカレー。東横インで良かった。ベッドに入ると明日からの不安が頭を過る。明日から天気は下り坂という放送。

3. 佐賀から嬉野（10月28日（金））

靴擦れにバンドエイドを貼り、膝に消炎鎮痛剤を塗り込み、6時前にチェックアウト。雨が降っている。用意していた合羽（首から腰まで、ノースリーブ）を被る。国道34号線まで出て走り始める。道はしっかり濡れているが、雨は小降りで助かる。夜が白み始めると車の量が増えてくる。嘉瀬川に差しかかる。河原に多くのテントが張られている。有名なバルーンフェスタのためだろうか。膝痛の事、靴擦れの事を考えキロ8分から9分で行こうと決める。4日間の行程で今日が一番短い行程だ。小雨で気持ちいい。コンビニでおにぎり、チオビタ、アミノバイタル、を摂取。歩道も申し分無。フラット道。3時間ほど淡々と歩を進める。靴擦れがチクチクと痛みだす。処置をしたいが雨が降っている中、適当な場所がない。進んでいる内に、長崎本線肥前山口駅が見える。駅の小さな待合室に入る。バンドエイドが擦れて出血している。両足だ。バンドエイドを貼り直し、その上からテーピングする。これが功を制しこの日の痛みは抑えられた。着脱したバッグを背負い合羽を被るも、なかなかバッグに引っ掛かり下に降りない。悪戦苦闘を見兼ねた駅員さんが手を差し伸べてくれる。小さな親切が身に沁みる。今回の靴は、買ってから5年くらい経つが、ソールがやや固い感じがして、レースに3、4回使ったままくつ箱に眠っていたものを、「もったいない」と思い選ぶ。選択ミス。ほったらかしにしていたこの靴の反抗だろう。踵に食いつき、足底筋の疲労を早める。レースには使えないなと思う。この靴が恨めしい。歩道も狭くなる。例のごとく、右側、左側と歩道が変わる。その度、車道を渡る。武雄市に入る。34号線は市街の外を通るバイパスになっている。自動車専用道だ。歩道無。仕方なく、町の中を見当を付けながら走る。膝が痛みだす。休憩を兼ね、うどん屋に寄る。お冷やがうまい。膝にもお冷やの Copp を当てる。痛みが和らぐ。豪華なうどん日替わり定食。嬉野までは20キロない。ゆっくり行こうと決める。長崎方面の34号線と佐世保方面の35号線の分岐点。ここから緩やかな峠道。市街を離れると再び、歩道が狭くなる。右側、左側と歩道が変わる。その度渡り変わる。峠を登り切る。下りに入ると膝が痛い。足底筋が痛い。嬉野市に入ってから、歩くほうが多い。雨もやや強くなる。膝と足底筋の痛みを軽減しないと、明日の最終日が不安である。途中、ドラッグストアに寄り、湿布薬を買う。足底筋に貼れば気持ちいいだろうと思う。縫る思いである。嬉野温泉街に入る。有名な和田屋別館の建物が見える。我が宿をたばこ屋で聞くと温泉街の端とのこと。15:30。やっと宿に着く。想像以上の古さ。玄関の自動ドアが引きずる様な音を立てて開く。温泉なし。コインランド

リーを使わせて貰おうと思い、聞くと乾燥機しか無いとのこと。膝は痛いし、雨は降るし、困ったなと思っていると、受付のおじさんがホテルの洗濯機を貸してくれるとのこと。ホテルの裏の方に案内され、洗濯物を放り込み洗剤を入れようとする、ホテルの洗剤をどっとうけてくれる。お金はいいと言う。優しさが有り難い。部屋風呂を浴びて下に降りる。このホテルと同名の和風旅館が前にある。そこそこの旅館だ。先程のおじさん、うちの浴衣を着ていけば温泉大浴場に入れるとのこと。膝痛、疲労をとるため入ってみる。ひたすら浸かる。食事も済み、昨日のドラフトの結果をスポーツ新聞で確認し、膝、足底筋に念入りにケアをして床に就く。寝入りばな、同窓会に先乗りしているN口君より電話。E崎君、H本君、幹事のM原君、I藤君等と飲んでいるとのこと。実に陽気な雰囲気。幹事のM原君に途中棄権もあるかも知れぬと弱気が顔を出す。

4. 嬉野から長崎へ（10月29日（土））

今日は同窓会当日だ。朝6時前に宿を後にする。まだ暗い。雨はまだ降っていない。ひたすら俵坂峠に向かい走る。長い上り坂。茶の花が咲いている。慎ましい花。茶畑がだんだん下になる。歩道もなくなり路肩の広い方へとコースをとる。関所跡の案内板。昔の長崎街道とある。膝痛、足底筋痛は不思議と感ぜない。峠の頂上を過ぎると大村湾が見えてきた。膝痛が再発しない様に6~7キロをゆっくりと下っていく。下りきると東彼杵インター入口。ここからは大村湾を右に見て、JR大村線と並行して大村を目指す。昨日までが嘘みたいだ。体調は悪くない。温泉の効果か、湿布薬等の手入れの効果か。先程まで日が差し掛け始めていた空も厚い雲に覆われ、ぽつりぽつりと降ってきた。午後からは本降りと言う昨夜の天気予報。激しくならないことを祈るだけ。

大村市街に入る。雨もやや激しさを増す。昔、お世話になったN原先生を大村医療センターに訪ねようと思い立つ。小高い丘の上にあるその病院へ34号線を離れ、登っていく。生憎、土曜日で休み。無駄足を使うが、電話で話が出来て満足。再び34号線に出て諫早を目指す。そろそろ腹が空いてきたが、合羽を着ているとはいえ、濡れたまま食事処に入る気にならない。コンビニで済ます。12時過ぎT永君に電話してみる。東京から来るS木君を空港に迎えに行くはずだ。大村市街を抜けると峠道。鈴田峠とある。この峠は想定外。知らなかった。例のごとく歩道に悩まされる。膝痛が少しずつ顔を

出してきた。T永君より電話。S木君を空港で乗せF地君と3人で34号線を長崎に向かうとのこと。どこかで私を抜いていくことになる。諫早市街に入る。34号線の標識を見失いコンビニで聞く。大きなロスなくコース復帰。諫早市街を抜け、一路ゴールの長崎ビューホテルを目指す。懐かしい名前の行く先を掲げた路線バスが行く。

雨足も強くなる。後ろから車の警笛音。T永君、S木君、F地君の乗った車に追いつかれる。S木君、F地君も10年数年振りの再会。皆元気そうだ。雨の中では積もる話も出来ず、今夜の会でと先に行ってもらおう。しばらく行くと、F地君より電話。この先にある、日見峠は右側の歩道をとるよう先行車から指示あり。結果的には的確な指示であった。長崎水族館を左に見て、いよいよ本日の難所、日見トンネルに向け、峠道を登る。降り付ける雨に体温が奪われる。寒い。すれ違う車が思いっきり雨水のとばちりを掛けて行く。想像以上に長い登りだ。片側2車線の車道。歩道は良い。中央分離帯にフェンスがあり横断不能。右側歩道だけがトンネルへと続いている。F地君のお蔭だ。新日見トンネルに入る。トンネルの中が温かい。排気ガスのせいかな。濡れた体が乾いていくようだ。抜けるとまた雨。500メートルほど行くと次のトンネル。道は下りになる。風が吹き上げてくる。トンネルを抜けると見覚えのある長崎の街だ。路面電車の車庫が見える。懐かしい蛍茶屋電停だ。雨の中、市街をひたすらゴールに向け走る。町名、電停、懐かしい。街ゆく人の雨傘をすり抜けながら走る。やっと着いたという安堵感が心を満たす。長崎県庁の坂を降りればゴールのホテルだ。信号を待つ間が寒い。早く熱いシャワーを浴びたいと思う。17:45ホテル着。チェックインのサインの字が寒さに震える。部屋に入り、湯船に浸かれば充実感と解放感が体全体を包む。終わった。

思った以上にハードな4日間だった。道中、「何故走るのか」この問いが頭の中に顔を出した。この回答は判らない。否、ぼんやりと判る気がするが、言葉で表現出来ない。何かに挑戦したいから走るのだろうか。好きだから……、それで良いとしよう。

さあ一、同窓会だ。